

# 母子生活支援施設における面接と日常生活場面への介入

我謝 美左子

## Interviews and the intervention of daily lives at maternal and child living support facilities

*GAJA, Misako*

### 要旨

在宅で暮らす母子世帯の方が、母子生活支援施設の利用世帯よりも多く、施設数の減少も指摘されている中で、自立支援を目的に掲げる母子生活支援施設を利用することの意味について明確にする必要がある。そこで、本論では、母子生活支援施設退所者へのインタビュー調査に基づく、当事者の評価を手がかりに、ソーシャルワークの視点から行う面接と、日常生活場面への介入が、主体的に自ら考えて行動する力をつけていくことにつながることを、実証することを目的とする。調査対象者3名からは、「自立につながった」「勉強じゃなければ整理ができた」「いろいろ聞いてもらって考えることができた」「いろいろ助けてもらわないとできなかった」「一緒にやってもらった」「3年間親子で過ごせてよかった」などの評価が得られた。これらの評価を調査対象者の背景を加味し分析した結果、面接と日常生活場面への介入が、自ら考えて行動する力をつけていくことにつながる事が概ね実証された。

### キーワード

母子生活支援施設、面接、介入、生活場面面接

### Abstract

Single-mother families living on their own predominate over those who live in maternal and child living support facilities; it is also noted that the number of such facilities is decreasing. Under these circumstances, it is necessary to clarify the significance of using maternal and child living support facilities, the objective of which is to promote user independence. Thus, the aim of this report is to demonstrate that holding interviews from the standpoint of social work and intervening in the residents' daily lives will help them acquire the skills to think and act proactively based on the interview surveys that were conducted with former residents. Three survey respondents commented: "It led me to my independence"; "I am not good at studies, but came to be able to organize my stuff"; "I was able to think clearly by speaking to them"; "I could not done many things without their help"; "They did all things with me"; and "I'm glad I was able to live together with my child for three years." As a result of analyzing these valuations, and after taking into account the survey respondents' backgrounds, it was established that, in general, interviews and interventions will help mothers acquire the skills to think and act proactively.

### Key words

maternal and child living support facilities, interview, intervention, daily lives

## 1. 研究の背景と目的

### 1) 研究の背景

母子生活支援施設は、1997年の児童福祉法の改正により「保護」から「自立支援」に目的を変更し、「措置」から「利用契約」へと入所の方式が変わった。そして、子ども虐待にあたる母と子が共にDV被害を被る環境にある世帯が増加する中、DV被害者の受け入れ体制の強化により、母及び被虐待児への支援の充実が求められるようになった。2007年、「母子の関係性に着目しつつ生活の場面において母子双方に支援を行うことができるという特性を活かしつつ、ケアの改善に向けた検討を行う必要がある。」(厚労省 2007)と、社会的養護の位置づけから母子生活支援施設の検討は必須となった。また、「施設で生活する

ことにより、在宅家庭への訪問よりも、母子の生活実態に触れやすく、地域での見守りよりも、危機介入がしやすい」とされた(厚労省 2011)。このような流れを受けて、社会的養護の役割を担う施設として、母子生活支援施設には、『母子生活支援施設運営指針』(厚労省 2012)、『母子生活支援施設運営ハンドブック』(厚労省 2014)が出され、より専門的な機能強化が求められている。

全国母子生活支援施設入所世帯数4,492世帯<sup>1)</sup>は、母子世帯総数123.8万世帯<sup>2)</sup>からみれば、0.36%と1%に満たない。このように母子世帯総数からみれば、圧倒的に少数の母子世帯が母子生活支援施設を利用している。社会的養護体制の中で子ども虐待やDV被害など重篤な問題を抱える母と子に対し、「在宅」に

よる訪問支援よりも、「施設入所」による専門的支援の方が望ましいというのであれば、母子生活支援施設ではそれに見合う支援が展開されなければならない。そのためには、『母子生活支援施設運営指針』にあるように「『生活の場』であることに軸足を置いた支援」とおとして、「『課題解決』と日常の『生活支援』を組み合わせた支援」を展開する必要がある。その支援の方法として、本論では、自立を見据えたソーシャルワークの視点から意図的に行う面接と、日常生活場面への介入を取り上げる。なぜならば、利用者の語りに耳を傾け、日常生活場面に起こる困難な状況を解決するプロセスを共有することをおとして、支援関係が強められるからである。そして、その支援関係を活用し、感情表出や意見表明を体験することが、利用者の主体的な言動力につながると筆者は考える。

## 2) 研究の目的

面接と、日常生活場面への介入が、自ら考えて行動する力をつけていくことにつながることを、当事者の声を手がかりに実証することを目的とする。母子生活支援施設を利用した経験をもつ当事者からの評価を、支援に反映させていくことは重要である。そこに本論の意義がある。

## 2. 面接と日常生活場面への介入

### 1) 面接

岩間（2001：11-16）は、アセスメントの段階に焦点をあてて、面接について、「クライアント自身が問題に対する認識を深め、その結果をアセスメントの材料とすることが求められる。アセスメントのための面接でありながら、それ自体が問題解決のプロセスという認識が必要である」と述べている。そして、ジョンソン（2004：274）は、面接の目標について、「必要な情報を得ることであったり、クライアントのニーズの充足や問題解決に向けての共同作業であったりする」と述べている。

つまり、クライアント自身が、問題を認識し問題解決に向けた共同作業のプロセス、すなわち、クライアント主体のアセスメントの方法として面接は重要な意味をもつといえる。

このことから、母子生活支援施設においては、ソーシャルワークの視点から、利用者が、問題を認識し問題を解決することを目標にした自らの課題を明確にするアセスメント及び、課題への取り組みのプロセスを繰り返すモニタリング段階での面接が重要となる。それゆえ、面接は、主たる支援であるケアワークと連動させて定期的に行う必要がある。

また、トレビシック（2008：215-206）は、「共感的になる能力は、面接時に使用される最も重要なスキルであり、利用者中心アプローチの根幹をなすものである。」とし、「他者によって理解されることの意味は重要である。それは、自己理解につながるからである」と述べている。言い換えれば、共感的に理解す

る能力の有無が、クライアントの自己理解を深めるかに影響する。そのため、共感的に理解するスキルをもって面接に臨まなければならないといえる。

### 2) 日常生活場面への介入

横山（2007：44-51）は、母子生活支援施設の日常性について、「保育、学童指導、就労支援、家事支援以外にも、なにげない相談や雑談や、挨拶など、プライバシーと共有空間の交差する場における利用者と職員らの日々の生活を意味する」と述べている。それゆえ、大塩（2007：28-36）は、「生活の場で『生活を支援する』ということは大きなリスクをはらんでいることであり、職員自身が一つひとつの支援の意味を理解しておかなければならない」と、関係性に生じる危険性をふまえた上で、職員は利用者に関わらなければならないと指摘している。

つまり、「プライバシーと共有空間の交差する場」で、子ども、他の家族、職員等と関わりあう場においては、他者との関係性等による疲労感も大きく、コミュニケーション上の困難が生じる場合がある。このような状況に至った時には、ソーシャルワークの視点に基づく介入が求められる。

介入について、山辺（2011：108）は、「意図的に変化を起こす活動である介入により、クライアントは自らの行動に深く関与することとなる」とし、岩間（2011：4-11）は、「クライアント自身がその変化を生み出す過程に深く関与するというソーシャルワークの価値が反映されている」と述べている。そして、小松（2000：18-22）は、レドルの考えを引用して、生活場面面接<sup>3)</sup>について、「クライアントが何か問題を起こした時の、その場の即座の情緒的介入」として、「利用者本人がコミュニケーションの手段を確保し、自己を取り戻すことを助けるために行われる介入方法だ」と述べている。つまり、日常生活場面に生じる困難な状況に変化を起こす過程に利用者に関わる、すなわち、利用者のコミュニケーションを支えていく方法として、意図的に生活場面面接を活用することが必要であるといえる。そして、ソーシャルワークの視点から、生活場面面接を活用して変化していく過程を支えることが、岡本ら（2010：206）が言う「クライアントが環境を改善するパワーを高め、環境との良好な交互作用を取り戻していく過程を意味する」エンパワメントにつながるのである。また、岩間（2011：4-11）が言うように、「エンパワメントの源泉となるのが本人の内発的な力であるが、ソーシャルワーク実践においては、その喚起と向上に向けたアプローチが求められることになる」という点では、母子生活支援施設において生活場面面接を意図的に活用し、利用者のエンパワメントを高めることは必然となる。

## 3. 退所者へのインタビュー調査

### 1) 調査の目的と調査方法

当事者の評価をもとに、ソーシャルワークの視点から行う面接と日常生活場面への介入の効果の有無を実証することを目的とする。

調査方法は、1時間半から2時間半程度の、半構造化面接によるインタビュー調査を実施し、テープ起こししたデータに、事例的背景を加えて分析を行った。なお、分析については、調査対象者の利用時に、実践者として関わっていた筆者の視点を中心とする。

## 2) 調査対象と調査時期

A 母子生活支援施設を、1980年代後半から2000年代前半に、利用した経験を持つ母子生活支援施設退所者3人（表1 調査対象者）である。調査は、2007年11月に実施した。

表1 調査対象者

	利用時の年齢	利用時期	利用年数	調査時の年齢
F	30歳代	1980年代後半～ 1990年代後半	7年7か月	40歳代前半
H	30歳代	1990年代	3年7か月	40歳代前半
J	30歳代	1990年代後半～ 2000年代前半	3年8か月	30歳代後半

## 3) 倫理的配慮

A 母子生活支援施設に対しては、書面にて、研究の目的と倫理的配慮等説明し、調査協力への意思を確認したうえで、誓約書に署名し同意書もらった。

調査対象者に対しては、職員の協力により、内諾が得られた退所者に電話を入れて、研究の目的と倫理的配慮等を説明し、インタビューの日時を約束した。インタビュー当日、書面にて、研究の目的と倫理的配慮等説明し、調査協力の意思を確認したうえで、同意書に署名してもらった。

## 4. 分析結果と考察

### 1) A 母子生活支援施設における約束面接及び生活場面面接

本論では、A 母子生活支援施設において、ソーシャルワークの視点から、意図的に行ってきた次の約束面接と生活場面面接による介入に焦点をあてて分析を行うこととする。

A 母子生活支援施設では、1988年頃より、母子指導員（現母子支援員）<sup>4)</sup>が、担当する母に対し、月1～8回、2～3ヶ月に1回など状態により頻度は異なるが、事前に日時を約束して半構造化された約束面接を行ってきた。これは、問題やトラブルが生じた時に行う面接とは異なり、利用者の語りに耳を傾け、共感的に理解するために、意図的に継続的に実施する面接として位置づけられた。つまり、調査対象者には、母子支援員との関係性において、自己覚知・感情表出・意見表明する機会として、問題を認知し、問題解決に向けて主体的に何ができるかを

考える時間と場が継続的に提供されていたといえる。

また、日常生活場面をとおして、ケアワークによる介入を行ってきたが、とりわけ利用者が何か問題を起こし、困難な状況に陥った際に、レドルの提唱した生活場面面接により危機介入的アプローチを行ってきた。

### 2) 調査対象者の利用時の状況

F：周囲とのコミュニケーションが少なく、感情表出が乏しく自己評価も低かった。生活や他者との関係が安定するにしがたい、自己を肯定的に認識できるようになった。子どもとのコミュニケーションが不足していたため、Fとの面接のほかに、親子面接を取り入れた。

H：DV被害者。前施設を夫に見つかったため広域措置により入所し、就労後、生活も早期に安定した。Hとの面接のほかに、子どもとの関係調整を目的にした親子面接を取り入れた。

J：出産以前の記憶をなくした状態で入所し、過去体験を語れないことや生活スキルの力不足等による不安感が強く、子どもに対する不適切なかわりが見られた。数回の一時保護分離後、長期的な分離を要する状態となり退所した。J自ら、被虐待児としての体験を持つ。

### 3) 分析結果と考察

#### 【約束面接に対する語り】

F：親のところで生活していたら自立なんてしてたのかな。生活しているんである程度わかったうえで、親には話せないことをずっと相談できたことで、自立を助けられたことかな。普段はだーっと生活しているだけですけれど、真剣に考えるのって、相談している時だけなんです。そうだよ、そういうために生活しているんだよねって、自覚し再認識するために考える場があったことが、私にとっては助けになった。精神的なことで原因がわからないことを、どうしたらいいかを聞かれ、考える場があったから、時間はかかったけれど、だんだんよくなり、自分で気をつけられるようになった。それが自立につながるんじゃないかな。そこにいたおかげで今ここにいるんだと、とらえられます。

F：大体居心地がいいですから出たくないですね。生活が落ち着いて安定してくると、生活できる場所ですから。お子さんが小学生に入ったら出た方がいて、ただそのころの自分の生活は読めない状態ですが、小学生になる生活が変わるタイミングを目標としてみようかなと何となく思った。出ることが大前提だから、誰に約束したわけでもないけど出なきゃと自分で目標を定めましたね。

Fは、生活のことをわかったうえでの継続的な相談の場、すなわち考える場があったことが、助けとなり、自分で気づける



ようになるなど、自立につながったのではないかと評価している。つまり、約束面接により、自立について考える過程で、問題の直面化、言語化や感情表出が促進され、自ら設定した退所時期を目標に生活していくことができたといえる。

H：職員と話をすることは、友達がいなかったから、私の中では気晴らし。出してしまえばなくなっちゃうわけだから、そういう意味ではよかったかな。変わるかどうかはわからないけれど、自分が思っていることや考えていることが正しいかどうかはわからないじゃないですか、それを聞ける場じゃないですけど、継続的に職員と話をすることで正しかったんだとか、そういう考え方もあるんだとか、勉強じゃないけれど整理ができたかな。

Hは、入所により夫の追跡から逃れる生活から、安心できる生活の場の確保につながった。他者との関係を断ち切らざるをえなかったという点では、「友達がいなかったから、私の中では気晴らし」という職員との関係性に基づく言語化は重要であった。そして、約束面接について「勉強じゃないけれど整理ができた」と評価している。

J：前のことがなかった分、とにかくいろんなものを飲みこんでいくしかなかったの。ただその中でも話せることと話せないことがあって、話せないことの方が多かったので会話が成り立たないことが怖かった。今だって、昔のことを尋ねられても話せないけれど、数年前のことなら話せるので。あの時は、数年前のことすらなかったの。だから、解決したいと思っていたのは、人づきあいというか社会性かな。

J：なじまなきゃ、何とかしなきゃというのはあったので、そういうのはまずは、職員からかなと思い、話していたと思います。前の寮よりは話していたと思いますよ。担当の職員には、嫌なことや、子どもや保育所についての話をいろいろ聞いてもらって考えることができた。担当の方以外とはあまり話さなかったですけどね。

Jは、「人づきあいというか社会性」を解決したかったという点では、約束面接での問題の直面化と自己課題の認知は重要であった。しかし、入所当初は、「会話が成り立たないことが怖かった」ことを考慮し、語りそのものがストレスにならないような配慮を要した。その中で、Jは、「いろいろ聞いてもらって考えることができた」と評価している。

#### 【生活場面面接に対する語り】

F：小さい子どもがいると思い通りにならないのに、声かけてくる他のお母さんの話し相手になってしまい、時間が削られ、

やらなければならないことがたまって困りました。人とつきあうことが得意ではなく加減がわからないので、話を切ってはだめかなと気をつかったり、邪険にはしてはいけないと思ってどうすることもできずに、子どもにあたってしまうこともありましたね。そんなところに先生がきて他のお母さんとの間に入ってくれたり、話を聞いてくれることで、話を少しづつ切ることができるようになり、子どもにあたることも少なくなっていくんじゃないかなと思います。

Fは、「人とつきあうことが得意ではなく、加減がわからない」というように、寮内や職場内等の他者との相互作用が子どもへの不適切な関わりにつながる要因の一つであると認識していた。そのため、他者により生活のペースを乱されるという困難な生活場面への危機介入、すなわちコミュニケーションの課題への直面化により、自ら解決していくことを支えられたと評価している。

H：だんだんと離れることだけだったかな。だんなの問題さえ解決すれば、あとは自分の頑張りで何とかかなと思っていましたから。

H：寮長が引き取ってくれなかったら行く場所がなかったわけだから。そういうふうには前の寮で言われてきたし、家族全員助けてもらったというイメージがあるから感謝もあるね。あそこにいたから今の自分たちがあるみたい。そういうふうに私が言ってきたから、子どもたちの中にもそういう気持ちがあるのかもしれない。早く入りたかったの、入れた日の夜はほっとして、ゆっくり寝たという感じでした。それまでびくびくして夜もあんまり眠れなかったんだと思うんですけど、その感覚というのは覚えてますね。

Hは、「だんなの問題さえ解決すれば、あとは自分の頑張りで何とかかな」というように、生活場面への介入を多くは要しなかった。そのため、前施設での生活を脅かす夫の暴力という困難な生活場面への危機介入、すなわち安定した生活の場の確保につながった広域措置自体を「家族全員助けてもらった」と評価している。

J：忘れてることとか追体験できたし、勉強の場だった。成長の過程なんですかね、根っこをつくってくれた場だった。生活のやり方、子どもとのつきあい方、一番小さいころだったから、保育園へ送っていく時間やお迎えの時間が遅れてしまったり、これじゃいけないというのがかなりあり、いろいろ助けてもらわないとできなかった。いろいろアドバイスを受けて、手続きを一緒にやってもらったりしたので、あそこで3年位親子で過ごせたことはよかったと思っている。

J：子どもへの関わりは、10でいえば1か2の割合でしかできてなかったと思います。子どもとは関係なく、自分の不安定

さで、子どもを何回か預けなきゃならなかった。結果、スタート地点に戻され目標がなくなったという感じだったかもしれないですね。普通の人と違う退所になっちゃいましたけれどね。もし、2人でアパートでくらしていたら、まず無理だったでしょうね。自分なりに立てた目標をクリアできなかったけれど、いられたことはよかったと思っています。

Jは、不安感情が強く、生活力や養育力を高めることへの意欲が低下していたため、生活全般への介入が必要であった。予定に基づくものばかりではなく、日々の状況や求めに応じた生活場面面接により、即時対応としての危機介入的な協働を要した。とりわけ養育力を高めるために、諸手続きを含み他機関との連携が重要だった。それについてJは、「いろいろ助けてもらわないとできなかった」ので、「一緒にやってもらった」という体験に対し、「追体験できたし、勉強の場だった」と評価している。

## 5. まとめ

調査対象者の語りからは、約束面接について、「自立につながった」、「勉強じゃないけれど整理できた」、「いろいろ聞いてもらって考えることができた」と3者共に評価している。つまり、支援関係を基盤にした、日常生活場面への介入や見守り等がある環境の特徴、すなわち「生活のことをわかったうえでの継続的な相談の場」の存在が、母子生活支援施設の意義の一つと考えられることが実証されたといえる。

また、生活場面面接については、FとHは、「子どもにあたることも少なくなっていた」、「家族全員助けてもらった」と、困難な生活場面への危機介入が、課題解決につながったと両者ともに評価している。とりわけ、生活全般に即時的対応としての危機介入的な協働を要する状況であったJが、「3年間親子で過ごせたことはよかった」と評価していることは大きい。なぜならば、記憶の障害を有し不安が強く、生活力全般の力が落ちている状態にあったJは、「助けて」と表出する声なき声が届く環境に支援者がいる必要があったからである。そのことについて、「2人でアパートでくらしていたら、まず無理だったでしょうね」というJ自身の語りからもわかる。結果的には親子分離となったが、その後、他施設でサポートを受けたあと、アパートで生活するに至った調査当時まで、児童養護施設にいる子どもへの定期的な面会を継続できていることに、「根っこをつくってくれた」場があったからこそ、親子関係が継続できていることが実証された。

このように、調査結果から、本論の目的である母子生活支援施設におけるソーシャルワークの視点から行う面接と、日常生活場面への介入が、自ら考えて行動する力をつけていくことにつながることを、調査対象者3人の語りから概ね実証された。

ただし、ここが本論の限界であるが、1施設に限った結果のため、母子生活支援施設全体への一般化とはならない。さらに、研究を深めていきたい。尚、A母子生活支援施設が独自の意図的に実施してきた約束面接の方法や生活場面面接の意図的な活用については、当事者から評価が得られたという点では、他の施設でも取り組んでいかれることに期待したい。

## 注

- 1) 平成24年度全国母子生活支援施設実態調査の実定員世帯数合計、「母子生活支援施設における支援について」(大塩孝江：2013)、第3回ひとり親家庭への支援施策の在り方に関する専門委員会資料
- 2) 平成23年度全国母子世帯調査の概要
- 3) 小松は、「生活上のできごと(ライフイベント)の治療的活用」と「クライアントが何か問題を起こした時の、その場の即座の情緒的介入」の2つに焦点をあてるレドルの生活場面面接について、危機介入的アプローチが多いため、「瞬間的で濃厚な介入が必要だが、生活場面面接を中心とした支持や癒しによりその危機が一応克服され、自己が取り戻されると利用者は自分の力で道を切り拓いていくことができるようになり、当面の援助過程は終了する」と述べている。
- 4) 1988年から実施された約束面接は、当初は母子支援員のうち1人だけが行っていたが、1989年ごろから、他の母子支援員も行うようになった。

## 謝辞

調査に協力してくださった調査対象者3名とA母子生活支援施設に感謝申し上げます。

## 文献

- 岩間伸之 (2001) 「ソーシャルワークにおけるアセスメント技法としての面接」『ソーシャルワーク研究』相川書房、26 (4)、11-6.
- 岩間伸之 (2011) 「地域を基盤としたソーシャルワークの特質と機能」『ソーシャルワーク研究』相川書房、37 (1)、4-11
- 大塩孝江 (2007) 「母子生活支援施設における家族支援とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』相川書房、32 (4)、28-36
- 岡本民生・平塚良子編著 (2010) 『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房、206.
- 厚労省 (2007) 『社会的養護体制の充実を図るための方策について』社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会報告書
- 厚労省 (2011) 『社会的養護の課題と将来像』児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会
- 厚労省 (2012) 『母子生活支援施設運営指針』
- 厚労省 (2014) 『母子生活支援施設運営ハンドブック』
- 小松啓 (2000) 「『生活場面面接』研究の構造と課題－『ソーシャルワーク研究』通巻95における『生活場面面接』をめぐって－」『ソーシャルワーク研究』相川書房、26 (3)、18-22
- Louise C. Johnson & Stephen J. Yanca (2001) Social Work Practice: A Generalist Approach, 7th ed. (=2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房、274.)
- Pamela Trevison (2005) SOCIAL WORK SKILLS-a practice handbook, second edition, Open University Press (=2008, 著：パメラ・トレビシック、監訳：杉本敏夫『ソーシャルワークスキル－社会福祉実践の知識と技術』みらい、215-216)
- 山辺朗子 (2011) 「わが国の社会福祉現場でのソーシャルワークの展開－母子生活支援施設の自立支援のあり方を例に－」『ジェネラリスト・ソーシャルワークの基盤と展開－総合的包括的な支援の確立に向けて－』ミネルヴァ書房、108
- 横山登志子 (2007) 「母子生活支援施設における2つの実践課題－先行研究の概観から－」『ソーシャルワーク研究』相川書房、33 (2)、44-51.